

号外

The Vet Allergist

学会報告

スペクトラム ラボ ジャパン(株)
安田 隼也
(日本獣医生命科学大学 獣医学科 3年)

An informational overview on in vitro allergy testing

第 23 回ヨーロッパ獣医皮膚科学会 ESVD/ECVD Annual Congress

会期：2009 年 9 月 17 日～19 日

会場：Bled Slovenia【スロベニア共和国 ブレッド市】

2009 年 9 月 17 日から 19 日の 3 日間、スロベニア共和国のブレッド市で開催された第 23 回ヨーロッパ獣医皮膚科学会に参加する機会を得ましたので、その概要を報告いたします。

◆◆開催地スロベニア共和国・ブレッド市◆◆

スロベニア共和国は旧ユーゴスラビアの一部でイタリアの東隣に位置する人口 200 万人ほどの国です。ブレッド市は、ブレッド湖とそこに浮かぶ小島に建つ教会そして湖畔の絶壁にある城が有名な観光地です。温暖な気候に恵まれた風光明媚なところで、旧ユーゴスラビアの大統領チトーが別荘を設けたほどです。シルバーウィークに近いこともあり随分と多くの日本人観光客の姿を見かけました。日本からブレッド市へのアクセスは、ヨーロッパ各地を経由し空路にて首都リュブリャナに入ります。そこから電車やタクシーなどを利用し 1 時間ほどの距離です。時間に余裕があればウィーンなどから電車を利用するのも面白いかと思います。



会場付近から湖岸の古城を望む

◆◆Pre-Congress Symposium◆◆

今回、リュブリャナ空港には夜着いたため、空港近くのクランという町に一泊して翌日電車でブレッド市に入りました。到着後簡単に観光スポットを巡り、午後、学会前日に開催される“Pre-Congress Symposium”に参加しました。学会の Long-Term Partners であるバイエル社から 3 題、ロイヤルカナン社から 1 題の講演が提供されました。バイエル社提供の演題は、フィラリア症に関するもの、リーシュマニア症に関するもの、そして難治性膿皮症に関するものでした。フィラリア症もリーシュマニア症も発症地域が気候の変動や人や動物の移動の増加に伴って拡大しているという点が印象的でした。膿皮症の治療方法については表在性や深在性などの診断方法、基礎疾患、抗生物質の選択、耐性菌、シャンプーなどを用いた局所療法について説明されていました。ロイヤルカナン社提供の講演で興味深かったのは、フランスとアメリカ(サンフランシスコ)の先生方がご自分の経験をもとに、疾病と好発犬種というテーマで発表されていましたが、犬種以外に地域性も大きな要因であるという点でした。

◆◇いよいよ本大会◆◇

今大会の参加者は、事前登録で約 460 人とのことでした。講演は Scientific Session(Short Communications などを含む)と卒業教育の Session の 2 部屋に分かれて行われました。初日の Scientific Session は“Scientific”と銘打っているだけあり基礎研究や人の医学を含めた講演でしたが、臨床現場ではないがしろにされてしまいがちな内容を皮膚科と関連付けて発表されています。なかでも、薬理学の専門家が、“多剤耐性菌を生み出さないためには、抗生剤を高用量で短期間使用することが重要である”という発表をされていたのが印象的でした。

◆◇歴史と先人の功績への敬意◆◇

講演終了後のウェルカム・レセプションでは、本大会の設立メンバーである Hans Koch 先生と David Lloyd 先生のスピーチがありました。今年は本大会設立から 25 年にあたる記念の会であったことから、このようなスピーチが催されたとのこと。大会の開催回数と設立年数が合わないのは、世界大会などがある場合に本会はそちらに統合するためカウントしないからです。

ドイツの臨床獣医師である Koch 先生は本学会の歴史をユーモアたっぷりに話されました。しかし、その内容は学会設立に尽力されたアメリカの臨床獣医師 George Muller 先生など、先人への感謝の気持ちで満ち溢れたすばらしいものでした。

◆◇専門医の診療対象は動物種を問わない◆◇

イギリス王立獣医大学の皮膚科主任教授である Lloyd 先生は、この獣医皮膚科学会を 2004 年世界大会の時と同様に「ファミリー」と呼ばれていました。更に、25 年という節目の大会の思い出と、協力してくださった方々への感謝の言葉、そして現在の取り組みなども話されました。その中で日本の『獣医皮膚科臨床』（学窓社）も取り上げられたことを嬉しく思いました。

また、本学会ではあらゆる動物を臨床的・基礎的問わずに扱うことを発表スライドに赤い下線を引いて強調されていました。すなわち、学術レベルで獣医皮膚科を標榜する以上は、小動物などに限らず動物全てを扱うことが当然という認識でした。それはアメリカでも同じで、専門医を取る際にその分野に関してあらゆる動物の事例を知らなければなりません。実際にこの大会においても馬の講演や牛、モルモット、ガラゴ(サル的一种)などもポスターセッションで取り上げられていました。また、前述の通り病理学や薬理学の講演も行われるなど、本学会の裾野の広さと取り組みに感心しました。

◆◇大会 2 日目◆◇

大会 2 日目の午前中に、イギリス人医師の興味深い講演がありました。アトピー性皮膚炎の原因因子には、遺伝子だけではなく社会階層 (Social class) を含めた環境的な要因などが大きく影響するなど、アトピーは一つの原因で起こらないと話されていました。さらに、治療薬の選択方法、およびアプローチの仕方は飼いや動物の状況によって臨機応変に代える必要があることを強調されていました。また、この日は 1 演題 15 分(質疑応答含む)のショートコミュニケーションが行われ、東京農工大学から 2 つの演題が発表されていました。質疑応答なども活発に行われ、期待の高さがうかがえました。

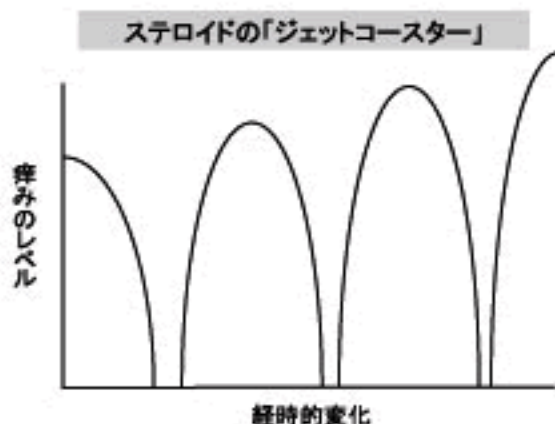


学会特製のワイン

大会 2 日目終了後には“ディナーダンス”が湖畔のホテルで開催されました。オープニングでは、スロベニア共和国の有名な歌が湖上のボートから披露され、学会用に作られた美味しいワインを味わい、ライトアップされた城や教会を眺めながらの夜会は大変楽しいものでした。高名な先生が音楽にあわせて楽しそうに踊るという、欧米流の楽しみ方を見ることができました。

◆◇大会最終日の重要なトピックス◇◆

最終日の講演では、オーストラリアの先生が、犬の痒みに対するアプローチ方法や治療薬の選択などを極めて具体的に講演されました。まず冒頭で、安易にステロイドを処方することを戒め、それを「ジェットコースター」的な対処法であると批判されていました。痒みのレベルがステロイドの投薬によって一時的に治るがしばらくして上昇、また投薬して症状が治まるがまた上昇……となり、図にするとまるで「ジェットコースター」のように見えるというものです。



実際の痒みは様々な原因が積み重なって起こるので、それらの原因をひとつずつ探し出して段階的に対処していくという「ステップバイステップ」の方法を話されていました。このアプローチは1ヶ月まえにU.C.DAVISで教えられた方法と極めて似ていました。まず、ノミの対策を徹底的に行います。次にマラセチアやブドウ球菌などの感染症のコントロール、食事療法、さらに環境抗原に対応するための「アレルギー検査*」と抗原特異的免疫療法の実施を段階的に選択していくという方法です。皮膚病を1つの薬で解決することは不可能であるため、それぞれの治療方法の効果・副作用・金額など利点と欠点を把握し、飼い主の意向を理解した上で複数の治療方法を組み合わせて実施するべきである、と話されていました。たとえば、とにかく費用を安く抑えて早く効果を得たいという場合はステロイド、費用は気にならないならばシクロスポリンをメインに、副作用が気になり時間がかかってもしよから根本的に治したいという場合は抗原特異的免疫療法などを行う、といった具合です。

* 一般にいう「アレルギー検査」は、皮内反応もしくはアレルギー特異的IgE検査を指し、優劣を問うことなく、症例の置かれた状況により使い分けられていました。

◆◇David Lloyd(デビット・ロイド)先生の講演◆◇

午後はLloyd先生の膿皮症、抗生物質療法、細菌の過剰増殖(overgrowth)に関する講演です。膿皮症の診断において、病変により症状を見分けること、厳密な診断的なアプローチをすること、潜在疾患の特定と治療が重要である、と話されました。さらに、膿皮症の治療において、ステロイドは病変の状態を隠してしまうため決して使用しないこと、多剤耐性菌の疑いがある場合は培養検査を行うこと、治療がうまくいかない場合は薬用量・使用薬・診断そのものの見直しや潜在疾患を洗いなおすこと、を話されました。さらに、コンベニアは長期間効く使い勝手のよい抗生物質であるが、使用する場合は能書に記載されている通り「本剤は、第一次選択薬が無効の症例に限定し使用すること(restrict to cases where other registered antimicrobials cannot used)」が条件となることを強調されていました。細菌の過剰増殖については、それによって“痒み”が引き起こされること、診断的アプローチが重要であること、初期では細菌の引き起こす痒みを除外すること、その診断にはスコッチテープ法が有用であること、多剤耐性菌がある場合はそれに対する試験を行うことなどを述べられました。



ESVDの設立メンバー【一番右端がLloyd先生】

◆◇大会全体を通して◆◇

講演内容全体に関して、獣医皮膚科に対する深い理解を目指すため、学会が目標に掲げている通り様々な動物、基礎研究、さらに人の医学との比較を取り上げる演題が多く、“One Medicine”という言葉を実践することの重要性を示すものでした。また、企業のスポンサーセミナーでないにもかかわらず、実際の商品名を写真で紹介しながら使用方法を、具体的に述べられていました。これは、今夏、研修することができたU.C.DAVISやコーネル大学においても同じでした。非常に有用な製品であれば積極的に紹介する姿勢は、臨床獣医師にとっても大変ありがたいことではないかと思えます。

もちろん細かい治療方法などは、所変われば少しずつ異なるところもあります。例えば食事療法に関してヨーロッパでは6週間加水分解タンパク食を使用し、U.C.DAVISでは8～10週間新奇タンパク食を薦めています。ヨーロッパやアメリカの北部ではノミがあまり問題にならないなど若干の地域差もあります。また、抗原特異的免疫療法の治癒率を前者は65%、後者は75%と評価しています。しかし、それらは大同小異で欧米ともに共通のポリシーに立脚していると感じました。

本大会は、日本人の参加者があまり多くなかったのが残念でしたが、ヨーロッパにおける皮膚病に対する姿勢・治療方針を知ることができた点で大変有意義なものでした。今後、ヨーロッパの学会にも積極的に参加し、多方面からの情報を得ていきたいと思えます。



スペクトラム ラボ ジャパン 株式会社
〒152-0034 東京都目黒区緑が丘1-5-22-201
TEL 03-5731-3630 FAX 03-5731-3631
E-mail: info@SLJ.co.jp
http://www.SLJ.co.jp